

編集後記

二村 聡 福岡大学医学部病理学講座

私たち人間は常に分類しながら生きています。例えば、好きな食べ物・嫌いな食べ物、好きな場所・嫌いな場所、好きな本・嫌いな本……枚挙に暇がありません。

さて、2019年の増刊号は消化管の、主に診断学で用いられる諸分類の特集です。松本氏、松田氏、小田氏、二村の4名で討論を尽くし、その骨子を編集委員会に諮り、本号の誌面構成を決めました。執筆者には各分類の定義・概念、特徴、使い方・使われ方はもちろん、その“来歴(由来や由緒)”も詳述してほしいと依頼しました。したがって、本号は単なる“諸分類の寄せ集め”ではありません。

日常診療の中で、私たちは必要に応じて各分類を用いています。紹介した分類には、ほぼ毎日用いているものもあれば、年に数回しか用いないものもあるでしょう。そして、見たことも聞いたこともないものもあるでしょう。いずれにせよ、各分類の作成経緯(それにまつわる秘話)や疾病構造を含めた時代背景を知っておくと、理解がさらに深化します。皆さまが各分類を用いる際、来歴や提唱者の意図にも注目していただきたいと思います。

洋の東西を問わず、これまで幾つもの優れた分類が提唱されてきました。その中には、改訂を重ねて洗練されていくものもあれば、一度も改訂されことなく今も汎用されているものもあります。また、疾患概念が大きく変わることによって見直しや訂正を余儀なくされる分類もあるでしょう。

分類の中には、提唱者の姓を冠したものが散見されます。例えば、村上分類、山田・福富分類、中村(卓)分類、中村(恭)分類、黒丸の分類などです。これらのほとんどは提唱者に敬意(homage)を捧げた結果の“呼び方”であって、原著(original)にはそのような分類名は記述されていません。さらに言えば、原著の筆頭著者が必ずしも当該分類の起草者とは

限りません。また、そのような呼び方・呼ばれ方を容認しない著者もいるでしょう。したがって、分類名に姓を冠して呼ぶ場合、それなりの配慮も必要です。だからこそ、その分類の歴史や時代背景を適切に理解しておく必要があります。若手の読者の方々に、一編集委員として注意を喚起したいと思います。

閑話休題。日常診療においては、どうしても分類できないもの(すっきりと割り切れないもの)に遭遇することがあります。この割り切れないものは、しばしばgray zone(中間領域)と呼ばれています。生命科学の領域においては、どうしても分類しきれないものが存在するということを認識しておく必要があります。それゆえに、分類項目の中には主要項目のほか、“雑(miscellaneous)”を設けておくことが肝要です。どうしても分けられない、このgray zoneから、将来、新しい知見が得られるかも知れません。“雑”は軽視できないのです。

白か黒かに分類する、この二分類法は簡単明快で誰にもわかりやすく、その用途は多いと思われます。けれども、この二分類法はgray zoneをいずれかに属さしめるという強行分類にほかならず、しばしば偏りも出てくる危険性を孕んでいます。言い換えれば、二分類法はgray zoneを排除するという基本的な欠陥があります。これが、gray zoneという分類単位(taxon)を設けた三分類法や多分類法が推奨されている所以です。

私たちは分類行為自体に執着するのではなく、分類行為を通して疾病の本質を理解するように努めたいものです。そして、大変に不便であった時代に血のにじむような苦労とその経験から実臨床に資する分類を提唱された先達に敬意を捧げなければなりません。そのことを肝に銘じ、2019年の増刊号の編集後記を終えます。編集委員一同、読者の皆さま方からのご批評を乞う次第です。